

プレーを身近に体感 喜びを共に

学生のスポーツ文化をはぐくむ
「体育会44部の発展に寄与したい」

関西大学体育会本部 関大スポーツ編集局 編集長
●文学部総合人文学科3年次生 金山 莉沙 さん

「強い関西大学」を先導しているスポーツが今、とびきり元気がいい。体育会44部の活躍ぶりを伝える学生新聞「関大スポーツ」の紙面にも、活気みなぎっている。勝負の瞬間から日ごとの練習まで、選手たちの動きを見逃すまいと追いながら、関大スポーツ編集局員は地道な活動を続けている。関大が共に楽しみ喜ぶ新聞が手元に届くまでには、東奔西走する取材、徹夜も辞さない編集作業がある。「学生新聞の原点に立ち返り、マイナー競技の普及にも役立ちたい」と金山莉沙編集長は語る。

LEADERS NOW!



金山 莉沙 — かなやまりさ
■1987(昭和62)年大阪府生まれ。帝塚山学院高等学校卒業。文学部総合人文学科英語英文学専修3年次生。2007年1月から関大スポーツ編集局編集長。

つながります」

継続して取材していると、選手の人間性に触れることができる。「すごく大人になったな」と感じることも。刷り上がった新聞を手配りしていると、「あれ、読んだよ」「おもしろかったで」という声を耳にする。「その一言がうれしくて、新聞作りの意欲がわいてくる」と言う金山さんに、編集方針などを聞いた。

「有名選手やメジャー競技の記事だと、読者の多くが食いつくかもしれないけれど、一番身近な体育会員が『いつも人気競技ばかりで、僕たちのマイナー競技は載らない』と思い、読者層もコミュニケーションの幅も拡大しない。だから、メジャー競技は今まで通り、マイナー競技に対しては今まで以上に取材体制を確立することをモットーにしています。

よく『カンスポにしか書けない記事』と言われます。しかし、読み手の『読みたい』と、書き手の『書きたい』と、書かれる側の『書かれない』が三位一体となることは難しい。良い記事を書くためには、選手個々のプレースタイルを研究するか、大学のプレースタイルを学ぶのは大前提で、その上で部の雰囲気や一人ひとりの選手を熟知し、日々のコミュニケーションを大切にすること。少なくとも、相手がストレートなもの言いができるように、その人に合う接し方を探して、コメントを引き出す努力をするようにしています」

金山さんは、小学3年生の時に書いた詩が新聞に掲載されたことがきっかけで、新聞を読むようになった。昨年の秋、放送局でアルバイトをし、報道に携わる仕事に就きたいという思いが強くなったという。編集長の役に次の人にバトンタッチするまで、関大の勝利の瞬間に立ち会い、喜びを共にする機会は何度もありそうだ。そこには広告塔ではないスポーツ文化の豊かさがある。

古来の日本刀の技を 伝承する

国宝・七支刀などの古代刀剣を復元
「努力と辛抱ができれば、素質があるといえる」

●刀匠
河内 國平 さん — 法学部 1966年卒業 —

刀匠・河内國平さんは関西大学の学生時代、二人の人生の師に出会った。一人は人間国宝の刀匠、宮入昭平。著書に感銘し、4年生の夏休みに学生服姿で長野県に訪ねていくと、師は弟子と共に山にこもって炭焼きをされていた。進む道が決まった。もう一人は榎原考古学研究所の初代所長で、関西大学文学部の教授だった考古学者・末永雅雄。河内さんは法学部の学生だったが、文学部の末永先生の研究室をよく訪ねた。それが古代刀剣の復元に心血を注ぐことにつながった。

「僕は師・宮入昭平と末永雅雄先生に影響を受けて、いまだに刀を作っている。この人たちに恥をかかせたらあかんと思っています」

河内さんは第14代刀匠河内守國助の次男として生まれたが、刀鍛冶で生活が営める時代ではなかった。物心ついた時、父親はすでに刀の仕事から離れていた。関大時代は「邦楽部の活動が99%」と言うくらい、尺八の演奏と邦楽仲間との交歓に燃えた。

人生を決定づけた宮入昭平著『刀匠一代』は、4年生の新学期が始まったころ、友達に教えられて知った。阪急百貨店の書籍売り場で手に入れた。「1週間ほど寝られないくらい」衝撃を受けた。「本の最後に『せめて一人でもよい、将来を託せるような刀鍛冶が生まれてくれないかと、そればかり切に願ってやみません』とあり、自分が呼ばれているような気がしました」

ハヶ岳山麓の炭焼き場で宮入昭平に会った後、河内さんが大阪に戻ったのは、秋の試験と卒業式の時だけだった。幸い、必要な単位は2科目しか残っていなかった。卒業後5年間、盆と正月以外は師匠のそばで暮らした。

「愛刀家でもあった末永雅雄先生は、宮入昭平に入門することを話すと喜ばれ、心配もしていただきました。大学の正門のところまで送ってくださって、高齢だった先生は『苦節十年だぞ、お前が帰って来るまで生きていたいなあ』とおっしゃり、時々励ましの手紙もいただきました」

河内さんは末永博士の指導の下、石上神宮(奈良県天理市)に伝わる国宝の七支刀を、日本刀と同じ鍛造で復元した。鍛造とは、赤く熱した鉄をたたいて刀の形を作り出す製法。河内さんは四苦八苦して何とか仕上げたが、七支刀は鍛造ではなく鑄造ではないかという疑問を持ち続けてきた。鑄造は、鑄鉄と呼ば



撮影・宮田昌彦(写真上)



河内 國平 — かわちくにひら
■(本名 河内道雄)1941(昭和16)年、大阪市生まれ。第14代刀匠河内守國助次男。66年、関西大学法学部卒業。宮入昭平(後に行平に改名)に入門、相州伝を修める。72年、独立し奈良県東吉野村に鍛冶場を設立。七支刀、稲荷山鉄剣、藤ノ木古墳出土土刀・剣などを復元。84年、再度人間国宝・隅谷正峯に入門、備前伝を修める。榎原考古学研究所古代刀剣研究会委員。東京芸術大学大学院美術研究科非常勤講師。奈良県指定無形文化財保持者。

れる炭素の量が約2%を超える鉄を1500度くらいの高熱で溶かし、土や石の鑄型に流し込んで形を作る製法。二十数年来の疑問を解くため、河内さんは鑄造グループの人たちと七支刀を鑄造で復元することに挑戦した。その成果が昨年の2月から3月にかけて、奈良県立榎原考古学研究所附属博物館で「古代刀剣の復元——七支刀の製作技術と刀匠河内國平の世界」と題して特別陳列された。

「プロなら正宗や一文字などの古名刀と勝負せなあかん」。河内さんは日本刀の技を伝承していくために、炭切りから始まる古来の製法を守っている。非常勤講師を務める東京芸術大学では、作刀を講義・実演してきた。若者に対しては——。

「職業はもちろん大切だが、人間を探して生きてみるのも面白い。僕は宮入昭平に惚れて、この人についていこうと思った。親方の葬儀の時、火葬場で僕は親方の右手の骨を拾った。これが僕に伝わっていると思った。素質があるとかセンスがいいとかいう言葉は、言い換えると努力と辛抱ができること。努力と辛抱のできる人間は素質があるといえる」